

佛國 巨匠 ロール氏逝く

佛蘭西畫壇の耆宿アルフレッド・フキリツプ・ロール氏は十月廿七日巴里に於て死去した氏の訃に接して黒田清輝畫伯は左の如く語る。

ロールは一八四七年巴里に生れた。元は古典派の出であるが、穩健なる外光派に屬する方で、氏の名聲は曾て私共の佛國留學當時既に嘖々たるものであつた、其作品は佛國の諸所の美術館等に陳列されてあるのみならず傑作として私の忘るゝとの出來ないものはルクサンブルグの美術館にある二點である。其一は



アルフレッド・ロール《農婦マンガ・ラメトリー》
オルセー美術館蔵

「ノルマンディに於て」と題する畫で、前景に牛が描いてあつて其側に鶏が二三羽あるのを子供を抱いた農婦が他の子供等と共に家の入口の階段に腰を下ろして眺めて居る圖と、今一つは農婦が牛乳を搾つて持歸る様を寫したもので、いづれも農家の風情を表はしたものだ。が實に立派な作である、氏は一八八八年サロンが新舊二派に分れた時、新派即ち國民美術協會の創立委員長となり、其後ちピユヴィストシヤワンヌの後を繼いで其會頭になつた程で、現代佛國畫家中の泰斗であつた。

『美術月報』丁五 大正八年二月二十六日

アルフレッド・フィリップ・ロール (Alfred Philippe Roll) 一八四六～一九一九年 黒田が生年を一八四七年としているのは誤りである) は労働をテーマとした外交派の作風で知られる。黒田のいう「農婦が牛乳を搾って持帰る様を写したもの」とは、現在オセー美術館に所蔵される《農婦マング・ラメトリー》を指すのだろう。この作品は一八八八年のサロンの年度作品賞を受賞、即座に国家の買い上げとなり、リュクサンブール美術館に飾られた。ロールについては岡田三郎助による追悼文もある (『ALFRED-PHILIPPE ROLLの事ども』、『中央美術』五一 大正八年二月)。またロールの師の一人であるアンリ・ジョセフ・アルピニー (Henri-Joseph Harpignie) 一九～一九一六年) についても、黒田は追悼記事を寄せている (『自然派の残党と云ふ感』、『美術』一三 大正六年一月 『絵画の将来』所収)。